

学位請求論文審査要旨

報告番号 乙 第 号

氏名 森 祐亮

論文題目 哲学的解釈学と人間形成
——ギュンター・ブックと戦後ドイツ思想史の一断面——

審査担当者

主査 慶應義塾大学名誉教授

修士（教育学） 眞壁 宏幹

副査 慶應義塾大学文学部准教授・社会学研究科委員

博士（教育学） 渡邊 福太郎

副査 高千穂大学教授

博士（哲学） 齋藤 元紀

学識確認 慶應義塾大学文学部教授・社会学研究科委員

博士（教育学） 綾井 桜子

I 概要

本学位請求論文は、第二次世界大戦後のドイツにおいて独特な教育哲学を展開し、「隠れた大家」と称されることもあるギュンター・ブック（1925-1983）の人間形成論の全貌を、ブックの師であるハンス・ゲオルク・ガダマーの哲学的解釈学からの影響、カント『判断力批判』へのブックの解釈とヘルバルト教育学のブックによる考察を検討することによって、「解釈学的人間形成論」として明らかにしたものである。

II 構成と内容

本学位請求論文の目次は以下の通りである。

凡例

序論 「懐疑的世代」の人間形成論：ブックと戦後ドイツ

第1節 本研究の目的と時代背景

1.1 本研究の目的

1.2 「懐疑的世代」の教育学者

1.3 ブックの来歴と教育学における功績

- 1.4 実践哲学の復権とブック
- 第2節 教育学におけるブックの受容
- 第3節 本研究の構成

第I部 継承

- 第1章 解釈学と実践哲学：歴史性と有限な理性
 - 第1節 哲学的解釈学における被投性概念の改铸と実践哲学の土台
 - 第2節 哲学的解釈学における倫理的なものの次元
 - 第3節 歴史性の限界？
- 第2章 ：ブックによるガダマーの継承：解釈学的経験の学習論的展開
 - 第1節 人間形成と解釈学的経験
 - 第2節 解釈学的経験としての学習

第II部 発展

- 第3章 ブックにおける同一性概念：古典的人間形成論の継承と更新
 - 第1節 「客観的目的論」とその批判
 - 第2節 ルソーとドイツの「ルソー主義者」たち
 - 2.1 ルソーにおける同一性とその限界
 - 2.2 「ドイツのルソー主義者」たち
 - 第3節 人間形成の目的としての同一性というモチーフ
- 第4章 「ガダマー／ハーバーマス論争」とブック：歴史性と普遍性の狭間で
 - 第1節 「ガダマー／ハーバーマス論争」と教育学
 - 1.1 歪な論争？
 - 1.2 「ガダマー／ハーバーマス論争」の人間形成論的／教育学的意義
 - 第2節 ガダマー陣営とハーバーマス陣営の応酬
 - 2.1 ハーバーマスとアーペルによるガダマー批判：伝統「か」、反省「か」
 - 2.2 ガダマーからの応答——「イデオロギー批判」に対するメタ批判
 - 第3節 人間形成的読み替えの試み

第III部 昇華

- 第5章 ブックのカント解釈と媒体としての範例：人間形成における歴史性と普遍性
 - 第1節 歴史性と普遍性の相剋
 - 1.1 道徳法則と教育の困難
 - 1.2 ガダマーのカント批判と慣習の擁護
 - 第2節 ブックの経験概念と普遍性
 - 第3節 範例概念とカント解釈

3.1 範例の概念史的素描

3.2 ブックの範例概念と『判断力批判』読解

3.3 リーデルの「カント歴史哲学」解釈とブックのカント解釈

第6章 ブックのヘルバルト論：有限な理性の生成と背景としての戦後保守知識人たち

第1節 シンポジウム「教育への勇気」とその思想的背景

1.1 「教育への勇気」と教育学からの反応

1.2 シュペーマンの「解放」批判とテンブルックの「教育への勇気」への訴え

第2節 ブックの「陶冶可能性」解釈とその保守主義的性格

第3節 教育の自律性の擁護と「美学による教育学の基礎づけ」という構想

結論：ブックの人間形成論の帰趨：戦後ドイツにおける理性と主体性の行方

第1節 ブック人間形成論の全貌：本研究の議論の要約と成果

1.1 本研究の議論の要約

1.2 本研究の成果

第2節 今後の展望と課題：「現存在の受肉」とそれ以前

初出一覧

文献一覧

謝辞

本博士学位請求論文は、「継承」「発展」「昇華」という III 部構成を採り、ブックの人間形成論の全貌を教育哲学・教育思想史研究の視座から明らかにしたものである。

第 I 部「継承」は、ブックの人間形成論を「解釈学的人間形成論」として、ガダマーの哲学的解釈学の教育学における後継に位置づけることにあてられる。

第 1 章では、ガダマーの哲学的解釈学の実践哲学的展開が扱われる。ハイデガーから「被投性」の概念を受け継いだガダマーは、それを「歴史性」へと彫琢し、自らの哲学的解釈学の中核に据えた。そこから導き出される実践哲学的帰結は、アリストテレスとヘーゲルを媒介としつつ伝統や慣習の理性的な性格を強調するものだった。こうした歴史性を基盤に置く解釈学的な実践哲学は保守主義や伝統主義といった批判を呼び起こすことになる。この批判に応えることが戦後保守派の人間形成論と位置づけられるブックにとっても重要であったことが確認される。

第 2 章においては、ガダマーにみられる人間形成論の萌芽と、そのブック学習論における受容の様相が取り上げられる。ガダマーはその主著『真理と方法』で、人間形成概念を近代科学の真理観によっては捉えられない領域にあるものと擁護する。ヴィーコ的な人文主義と 18・19 世紀ドイツの精神科学の伝統を連続的に捉え、ヘーゲルに依拠することで、ガダマーは人間形成を精神の普遍性へと向かう運動と規定する。しかし、彼はそれを有限な歴史

のなかで行われる解釈学的経験とする点で、絶対精神を設定するヘーゲルと袂を分かť。ブックの学習論も、基本的にはこのガダマーの解釈学的経験としての人間形成という構想を引き継ぐので、「解釈学的学習論」と特徴づけられる。ブックによれば、学習の可能条件は意識に常に先行する経験に求められる。すなわち、ブックにおいて学習とは、白紙状態に新しいものが書き込まれる過程ではなく、常になんらかの仕方で臍げに受け取られているものが徐々に明らかになっていく過程なのである。こうしたブックの学習論は、ガダマーの言葉に倣えば、歴史性をその可能条件とする特徴を示しており、まさに解釈学的経験の一樣態と言えることが判明する。ただし、こうしたブックの学習論は知の拡大にとどまらず、学習者の地平そのものの変容を迫るものでもあるため、学習論を超え人間形成論へと必然的に進む性格をもつと述べられる。

第 II 部「発展」は、ガダマー哲学的解釈学を摂取しつつも、同時に独自の人間形成論を築き上げていく過程が解明される。

第 3 章では、ブックはシラーやヘーゲルの古典的人間形成論を継承しつつも、ガダマー哲学的解釈学の立場に立つことで、その更新を図ったことが論じられる。すなわち、ブックは、コメニウスに代表される「客観的目的論」を、歴史性を無視した前近代的な思考図式として退け、ルソーとドイツにおけるルソー主義の展開に積極的な意義を見出す。「同一性」という概念を人間形成論に持ち込んだルソーだが、明白にそれを人間形成の目的として定式化したのはシラーに代表される「ドイツのルソー主義者たち」と呼ばれる思想家の一群だった。ブックはこうした思想家たちの「自らの同一性を普遍性に定位して形成する」古典的人間形成論の基本的な図式を受け継ぎつつ、そこにガダマーの歴史性を読み込むことで更新を図ったとされる。

第 4 章は、舞台を戦後ドイツに移し、ガダマーとハーバーマスらとの間で行われた「ガダマー／ハーバーマス論争」を教育学的に読み解くことが試みられる。ハーバーマスらからすれば、ガダマーの歴史性を重視する立場は、伝統に潜む暴力性を覆い隠してしまう可能性をもつ。彼らによれば、社会科学はむしろ精神分析の手法をモデルとしつつ、社会の病理としてのイデオロギーを暴かなければいけないと主張する。他方ガダマーからすれば、学問に従事する者たちもまた歴史性を免れることはできない以上、そのような役割を社会科学ないしは精神科学に与えることは僭称であるとする。論争に参加したわけではないが、この問題に対するブックの立場は、基本的に歴史性を重視する点でガダマーに近いが、その一方、伝統に優位を認める原理を存在論的に基礎づけるガダマーと主体における自由の余地を認める教育学者ブックの間には距離があるともされる。すなわち、主体の権能を認める点で、ハーバーマスらの立場に歩みよっていることが、伝統を捉え返す原理としてブックがカントの「主観的普遍性」の議論を介在させていることから考察される。

第 III 部は、ブックがガダマーの哲学的解釈学の枠組みを用いつつも、それとは異なる独

自な人間形成論を構築していったこと、そしてその内実を、特にブックによるカントとヘルバルトの解釈に焦点を当てつつ明らかにすることに割かれる。

第5章ではブックのカント解釈が取り上げられる。カントの超越論的自由は自律を意味するが、それは同時に教育を不可能にする可能性を生じさせる。ガダマーはこのカントの厳密な二元論的倫理学を批判し、慣習に倫理的な意義を認める立場を取る。ブックはそれを引き受けつつも、カントとガダマーの両者の調停を自らの人間形成論において試みる。ブックは経験概念に改鑄を加え、経験における個別と普遍の混淆状態をその本質とする。その上で、ブックはカント『判断力批判』を倫理学的に読み変え、カント自身によって道徳的価値を引き下げられた「範例 Beispiel」の復権を試みる。「範例」が『判断力批判』における理想に、道徳法則が理念に重ね合わせられ、歴史的で経験的な概念である「範例」にも普遍的な道徳法則への通路を認めようとするのである。こうしてブックは、「範例」に歴史の内部で行われる他律から自律への移行可能性を見出すとされる。この『判断力批判』の倫理学的な読み変えは、同じくガダマーの教え子であり、「実践哲学の復権」を主導したマンフレート・リーデルとも共通しており、いわば「ポスト・ガダマー世代」の特徴でもあることが示唆される。

最終章の第6章では、ブックのヘルバルト論が考察される。その際、重要になるのが、ブックの思想的背景となるいわゆる戦後保守派との関係である。戦後ドイツにおいてヨアヒム・リッターとその弟子のリッター学派を始めとする保守派はかなりの影響力をもっていたが、フランクフルト学派の陰に隠れ、これまで思想史的に取り上げられることは少なかった。特に教育学においては、フランクフルト学派の流れを汲む「解放的教育学」の趨勢もあり、戦後ドイツ保守派の教育的思考の本質に言及されることが少なかったのである。本章で行われるのは、まずは、ヘルバルト解釈を通じて、ブックが戦後保守派に親和的な教育学者であったことを明らかにすることである。そのための手がかりとして注目されるのは、戦後ドイツ保守知識人が1978年に開いたシンポジウム「教育への勇気」である。そして、ここで登壇した保守派と称される知識人が、教育を社会改良の手段とすること、教育の科学的統制、教育目的としての「解放」などを批判し、文化的営みとしての教育の重要性を語ったことが確認される。ブックのヘルバルト解釈は、こうした観点から理解される必要があり、特にブックはヘルバルトを介して陶冶可能性の条件を文化的に規定されている事態に見出していたこと、つまり、実践的理性は現実にある理性の堆積物である伝統や古典、慣習的エートス（「集合的理性」とも語られる）に触媒されることで、理性的主体として立ち現れるとされる。しかし、同時にブックは、最終的には、カント超越論的倫理学をカント『判断力批判』を介して美学的に解釈し直したヘルバルトを経由することで、教育と学習の営みが歴史的に規定されつつも、主体（個人）の理性的意志によってこの伝統や文化を規定し返し自由で新たな解釈が展開される可能性を教育と学習において担保していたこと、すなわち、ガダマー哲学的解釈学を昇華した「ポスト・ガダマー世代」の「解釈学的人間形成論」を展開したことが結論とされる。

III 評価

本学位請求論文は、ギュンター・ブックの人間形成論の内実と可能性を、哲学や思想史をも考慮に入れた幅広い観点から再構成し、その全貌をはじめて明らかにした研究であり、その独自性や先駆性において高く評価できる。

ブックの人間形成論が、主としてハイデガー哲学やガダマー哲学的解釈学を受け継ぎつつ戦後ドイツ保守派の潮流（新アリストテレス主義）に思想史的には位置づけられること（第 I 部）、その一方で、シラーやヘーゲルらの普遍性に向けた「同一性」形成を目指す古典的人間形成論を正当に受け継ぐものであったこと（第 II 部）、さらにブックによるカントやヘルバルトの解釈を通して、最終的にはハイデガーやガダマーらの立場にとどまらない人間形成論を教育学者として形成するに至ったこと、すなわち、フランクフルト学派やその影響を受けた解放的教育学の立場とは異なり、歴史性を帯びた「集合的理性」である伝統・慣習やエトスを重視する保守派の立場に立ちながらも、カント『判断力批判』の範例概念や主観的普遍性の議論、ヘルバルト教育学の陶冶可能性概念の再検討を通じて（第 III 部）、歴史と伝統に深く根差しながらも普遍性を目指す理性的意志をそなえた主体の形成を論じる「解釈学的人間形成論」を展開したことが明瞭に描き出されている。

ブック研究としての意義を越え、思想史研究、教育哲学研究、そして解釈学研究への寄与という観点から評価すれば、以下のようにまとめることもできる。まず、フランクフルト学派や解放的教育学の陰に隠れがちだったガダマーやリッター学派の流れをくむ「リベラル保守」をフランクフルト学派とは異なる理性の捉え方をする立場として対抗的に位置づけた点で、戦後ドイツ思想史の研究として意義がある。次に、他律の営みを含まざるを得ない教育において自律的主体の形成がどのように可能になるのかという近代教育の根本問題に、本論文はブック解釈を通してある一定の解を与えた点で教育哲学的意義がある。最後に、近代的主体と人文主義的伝統を根底から否定するハイデガーから始まる哲学的解釈学の流れの中にも、人文主義的教養を重視するガダマーを介し、古典的人間形成論（Bildungslehre）の伝統が存在することをブックに即して指摘した点で解釈学研究上の意義が認められる。

しかし、なお検討すべき余地が残されていることもまたたしかである。公開審査会では、以下のような問題が提起され、質疑応答が展開された。

現代哲学では厳しい疑義が寄せられる近代的主体概念を、ブックは歴史的規定性に着目して改鑄しているとはいえ、なお「理性的意志」という点に着目し維持しているが、これが妥当だとする論拠が必ずしも明示されているとはいえない。また、ブックの教育学説史解釈に関しても、同様な問題が指摘できる。ブックは、ルソーを評価し、「ドイツのルソー主義者たち」に近代教育学的思考の成立を見る。この学説史的理解を通して見えてくるブックの立場は、「普遍を介して自らの同一性を獲得すること」を目指す人間形成論だとされる。こ

の立場は、リッター学派に連なるやはり保守派に位置づけられる政治哲学者リュッベとは異なり、「同一性」への形成を信じる立場といえるが、そうであるとすれば、ブックはすでに教育学的にカントとシラーを経由した古典的人間形成論の圏内にあったわけで、近代的主体に先行する世界内存在というありかたを起点に展開されるハイデガー存在論や、理解や理解主体に対する先入見や伝統の先行性を強調するガダマー解釈学を継承している事実とどう折り合うのか。これはさらに、学習・経験という反省的知の営みと、それを可能にする条件とされる先行する学習・経験によって規定された前反省的領域とのあいだの関係の問題にも通じるものである。

こうした疑問に対して、学位論文請求者は、ブックが哲学的解釈学の影響を受けてはいるものの、理性的意志や主体概念を前提に思考せざるをえない教育学者であることにその原因が求められるとの応答がなされた。すなわち、存在の根本様態を思考する哲学とは異なり、教育学は現実世界で行為し実践する主体の形成について考えねばならない。その際、考察の対象としての主体を解体し批判したとしても、行為者として主体はやはり想定されねばならない。この問題は、最終的には、教育学という近代的な学問特性に通じる問題なのだが、現代哲学と教育学の思考の差異に関するより詳しい説明は残念ながら展開されなかった。ここに今後の課題があることはたしかである。

さらに、同様な問題として、「普遍性」が経験および学習の超越論的条件であると同時に人間形成の最終的な目的ないしは理念でもあるとされるが、「哲学的／存在論的」なそれから区別された「教育学的／現実的」な普遍性の具体像が曖昧なままにとどまっているとの指摘がなされた。この疑問に対しては、教育学者・村井実の「善さ」をめぐる議論が例として提示されたが、哲学的解釈学の立場によらない村井の議論を持ち出すことが適切であるのかどうか、これもまた問題として残ることになった。

次に、本論文は、他律から自律への移行可能性をめぐる教育学の根本問題に関して、現象界から叡智界への革命的跳躍（カント）ではなく、現象界の内部での「緩やかな移行」の可能性をブック人間形成論に見ているが、現実における自律性の程度や段階、あるいはそもそもそれを「自律性」と呼ぶことが妥当なのかといった問題が指摘された。たしかにブックは、ヘルバルトに倣って教育を「作為」と考え、「前反省的な人倫性の産出」（ブック）を教育の任務としているが、同時にこの引用直後に（166頁）、著者は、「作為としての教育」は「主体を規定する現実」ではあるものの、「それは同時に、「現実を規定し返す主体」をも前提として」おり、その結果、「人倫性は生成」し、他律からの自律への緩やかな移行は可能になるとされる。しかし、そういえる根拠は何か。学位論文請求者はガダマーの理解論で展開された「理解とは別様に理解すること」の影響をあげていたが、ここでおそらく、第5章3節で展開されたブックによるカント「範例」概念の解釈の際に、「範例」の模倣はコピーではなく「すでに自由な継承という段階を含んでいる」と述べるブックと関係してくるはずなのだが、その関連性が明示されているとはいえない。そもそも伝統やエートスや規範へ向けて規定しようとする教育者を前に、被教育者は自由に選んだり継承したりできるものだろう

か。できるとすれば、そこにはある種の歴史に規定されない理性的意志がすでに被教育者に想定されているからではないか。そして、この問題は、第5章ですでに検討されているカント『判断力批判』で展開された美的判断の「主観的普遍性」の問題にも密接に関係すると思われるのだが、この関連が読み取りにくくなっている。端的にいうと、自律への「緩やかな移行」問題を解く鍵を自ら提示しておきながら、うまく接続させていない。これはまた、ヘルバルトの「倫理学の美学的基礎づけ」に着想を得たブックの「教育学の美学的基礎づけ」の内実を、その「美学的」という誤解を招きがちな言葉の含意に即して詳細に論じるべきであったのではないかという感想とも連動している。

最後に、本論文の研究方向性に関して意見が出された。先行研究との差異化を図る意図のもと、ブックの人間形成論の現代的アクチュアリティーを積極的に打ち出すことが戦略的に避けられ、テキストの内在的解釈と思想史的位置づけに自己限定する禁欲的な方向性が採用されている。それゆえ、上記のような指摘が出てくると考えられるのだが、この戦略はたしかに学術論文としてブックの全体像を解明するという目的に適ったものではあるにしても、本論文が取り上げている「理性」、「自律性」、「同一性」、「経験」、「学習」といった教育学上の基礎概念は、現代においても教育学的にアクチュアルな問題を提起するはずである。ブック論を超え、現代の教育問題にも通じるようなオリジナルな哲学的展望をより明確に打ち出しても良かったのではないだろうか。

IV 審査結果

第二次世界大戦後のドイツを舞台に、理性の相貌をめぐって哲学者、社会学者、政治学者によって展開された議論を哲学的、教育哲学的、思想史的観点からの確にまとめ、その中でブックを保守派に属しながらも理性的意志を備えた主体の形成を論じた教育学者として位置づけ、この「隠れた大家」の意義を明快に示しえた点、哲学とは異なる教育学や人間形成論の思考の独自性を取り出すことに成功している点などにおいて、学術論文としての意義は大きい。公開審査会では上述のような問題や課題が提示されたものの、こうした問題自体、簡単には答えられない根本的なものであり、なんら本論文の意義を損なうものではない。むしろ現代でも教育の基礎論において何度も立ち帰らねばならない重要な問題を改めて再認識させてくれたといえるものである。

以上から、審査員一同は本論文が博士号（教育学）を授与するのに相応しいものであると判断する。